

説教 『中心は死と復活』山本 護 牧師
聖書 ホセア書 6:1~3/コリントの信徒への手紙 一 15:3~8

最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたもの(1コリント 15:3)」。すなわち信仰にとって最も大切なことは、キリストが「死んだこと(15:3)、葬られたこと(15:4)、復活したこと(15:4)、現れたこと(15:5~8)」。この出来事について「聖書に書いてあるとおり(15:3~4)」と念を押す。死は預言者に(イザヤ 53:8)、復活は詩人に依拠している(詩編 16:10)。加えて「二日の後、主は我々を生かし、三日目に、立ち上がらせてくださる(ホセア 6:2)」という預言も確証となっただろう。

コリント教会には「死者の復活などない(1コリント 15:12)」と言う人たちが少なからずいた。だからパウロは、どっしり「腰を落として」これを語っている。「死者が復活する」という信仰は、理性を重んずるギリシア世界では実に馬鹿々々しいことで(使徒 17:32)、コリント教会もその中にあった。このことに関しては、21世紀の世界も同じ。私たちは、「死者の復活などない」という世にあって、キリストが「葬られ、復活した(15:4)」ことを「最も大切なこと」として受けとめ、かつ宣べ伝えている。

その最も大切な「死と復活」とは、実際どんなことなのか。死は、目撃でき、やがて自ら体験するだろう。では復活はどうか。たとえばラザロ。死後四日のラザロに(ヨハネ 11:39)イエスが命ずると(11:43)、「死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆いで包まれていた(11:44)」。墓から蘇った様子は怪奇なミイラ男のようだが、彼もやがて死ぬ。これは奇跡であっても、「復活」ではない。

復活とは、キリストが共に歩いて下さり(ルカ 24:15)、教えて下さり(24:27)、パンを裂いて下さる、確かに生きておられる現実(24:30)。ところが「生けるキリスト」を了解した途端、姿は消える(24:31)。キリストはどこへ行ってしまったのか。人間存在の最深部で、静かな炎となられる(24:32)。次のようにも言えよう。死は、人間から神への道が閉ざされる闇。復活は、神から人間への道が開かれる光。

キリストは「死に、葬られた(1コリント 15:3~4)」。キリストは、人間の最も暗い底辺にまでやって来られ、私たちの死をも共にされる。これは信仰者だけの救いではない。キリストはもはや肉に縛られることなく、死んだ未信徒の場へも赴く。「霊においてキリストは、捕われていた霊たちのところへ行って宣教された(1ペトロ 3:19)」。人間が往く道は狭いが(マタイ 7:14)、神から来る道は広く開かれている。

「二日の後、主は我々を生かし、三日目に、立ち上がらせてくださる。我々は御前に生きる(ホセア 6:2)」。復活は、眠りこけた感覚を目覚めさせる。預言者は、すべての民に「我々は主を知ろう。主を知ること追ひ求めよう(6:3)」と促す。復活とは、私たちを存在させる生命の根源に還ること。だから預言者は「さあ、我々は主のもとに帰ろう(6:1)」と語る。「主のもとに帰る」とは、見知った道を引き返すことではない。「主を知ること追ひ求めよう」とあるように、生命の根源に向かう希望なのだ。

春、あらゆる事象が生命を讃美している。「主は曙の光のように必ず現れ、降り注ぐ雨のように、大地を潤す春雨のように、我々を訪れてくださる(6:3)」。数多くの弟子が復活のキリストに遭遇した(1コリント 15:5~8)。つまり復活は宗教的な幻視ではない。春の息吹のように柔らかい、神による再創造。



【おまけのひとこと】

キリストの決意 その力と業は 死の深さで測られる 人にはまるで底なしの死でも 死は復活によって測られ 復活は死の深さによって測られる 暗闇に小さな灯 足許が分かるほどの照度でも